

国境の要塞化と難民と移民の狭間で—アフガニスタンからの退避をめぐって

Fortified Boundaries between Refugees and Migrants: Evacuation from Afghanistan

小川 玲子 (千葉大学)

Reiko Ogawa, Chiba University

キーワード：移民、難民、アフガニスタン、国境、要塞化

国境の要塞化とは、物理的な障壁を設けることで越境のコストを高くし、望まない移住者を防ぐことを指す (Hassner and Wittenberg, 2015)。これまで欧米においては人の移動を制限する目的で国境に壁を建設したり、治安部隊を配備したり、ドローンや IT 技術を駆使した様々な管理のテクノロジーによって国境の要塞化が行われてきたことが指摘されてきた (Korte, 2021; Menjivar, 2014)。1990 年以降、世界中で国境の要塞化は増加しており、その 80% 以上はイスラム教徒が主流である国家を対象として行われている (Hassner and Wittenberg, 2015)。また、第 3 国などの遠隔地で移民の流入を管理する「国境の外部化」や収容や送還を通じた「国境の内部化」も指摘されてきた (Menjivar, 2014)。本報告では、2021 年 8 月の政変によって生じたアフガニスタンからの退避をケースとして取り上げることで、日本における国境の要塞化のメカニズムと難民の移民化、について検討することを目的とする。

2003 年以降、日本政府はアフガニスタン復興の一環として教育分野の国際協力を推し進めてきており、文部科学省による国費の奨学金の他、アフガニスタン政府の行政官を育成するための JICA の奨学金により 1400 名以上のアフガニスタン人留学生を受け入れてきた。留学生は工学や農学、医学や法学などの分野で修士号や博士号を取得し、帰国して前政権や大学でポストを得ていた。しかし、2021 年 8 月 15 日にイスラム原理主義勢力のタリバンが政権を掌握したため、元留学生らはタリバンからの迫害のリスクにさらされることとなった。

元留学生らは日本に留学していたこと、前政権において中核的人材であったこと、タリバンとは異なる民族や宗教的マイノリティであること、女性であること、研究内容が反イスラム的であるとされたこと等の累積的な理由により、迫害を受ける恐れが高いとして日本の大学関係者や NGO、民間人に退避を求めてきた。元留学生らはタリバンに特定されないように居場所を頻繁に変えてきたが、中には死刑宣告の脅迫状を受け取ったり、暴行や家宅捜索を受けたり、家族が連行されてしまったケースもある。カブール陥落以降、給料は支払われておらず、仕事もなく、銀行からの預金の引き出しも制限されている。特に女性は高等教育を受けることも就労することも許されず、生活は大変困窮している。タリバンに殺害される苦しみは一瞬だが、子どもたちが飢えて死んでいく緩慢な死を見るのは耐えられない、と言った元留学生もいる。

筆者はカブール陥落以前からアフガニスタンの元留学生の退避に関わり、その後、在日アフガニスタン人家族から本国の家族の呼び寄せの要請を受けたことにより、アフガニスタン人支援

に関する複数のネットワークの設立にかかわってきた。本報告では元指導教員や身元保証人としての経験、国会での議論、会合での発言記録、設立当初からかかわっているアフガニスタン退避者受け入れコンソーシアムが行った調査等、の資料を分析対象とする。

アフガニスタンからの退避希望の声を受けて外務省は退避要望の窓口を設置し、「個別に判断する」とした。入管はアフガニスタンの政治状況に鑑みて、在留アフガニスタン人を送還しない方針を打ち出した。しかし、その後、身元保証人は日本人か永住者が求められるようになり、10月下旬には経費支弁、迫害の恐れに加えて、中長期の在留資格認定証明書の取得が要求されることとなった。中長期の在留資格とは、留学か就労の在留資格を取得することを意味する。つまり、アフガニスタン人は一度入国すると帰国できない・させられないことから、留学や就労という形で「安定して自立している人」しか入国が認められないこととなった。また、家族滞在ビザに該当する配偶者と子以外の両親や兄弟姉妹などは、どれほどの迫害があろうとも短期滞在ビザは発給されることが伝えられた。その結果、2022年3月時点でまだ大勢が退避できずにいる。

日本は四方を海で囲まれており陸路では入国することは出来ないため、国境管理のための物理的なインフラ建設は必要ない。しかし、アフガニスタンをめぐる国境の要塞化は、難民性の高い人たちに対して、ビザの発給を規制するというソフトな手法で領域内に入ることを阻止する形で行われてきた。そこには官僚制による管理のテクノロジーが作動しているが、第3国を通じた国境の外部化が行われているため、要塞化は物理的な暴力を伴わずに密かに行われている。

アフガニスタンに対する国境の要塞化はウクライナからの退避者の受け入れと対比した場合に、その特徴が明らかになる。すなわち、国籍、人種、階級、宗教によるヒエラルキーが「望まれる退避者」と「望まれない退避者」を明確に線引きする形で日本社会の中で制度化されており、そのヒエラルキーは領域内における国境の内部化としての入管収容の問題とコインの裏表として捉えることができる。また、日本の入管政策をめぐっては国際労働移動としての議論と、難民や非正規滞在をめぐる収容や送還の問題系はこれまで別々に議論されてきた。しかし、難民性の高い脆弱な人たちを留学生や労働者へと振り分けていくネオリベラルな力学は、経済的に有用である限りにおいて包摂する「難民の移民化」と呼べる。アフガニスタンからの退避者は難民政策と移民政策の狭間で宙づりにされており、「迫害を受けるおそれがあるという十分に理由のある恐怖」は官僚制によるソフトな国境の要塞化によって不可視化されている。

参考文献

- Hassner, R.E. and Wittenberg, J., 2015, Barriers to Entry : Who Builds Fortified Boundaries and Why?, *International Security*, 40(1):157-190
- Korte, K., 2021, Filtering or Blocking Mobility? Inequalities, Marginalization, and Power Relations at Fortified Borders, *Historical Social Research*, 46 (3):49-77.
- Menjivar, C., 2014, Immigration Law Beyond Borders: Externalizing and Internalizing Border Controls in an Era of Securitization, *Annual Review of Law and Social Science*, 10:353-369.